

編 集 後 記

本年は消化器関係の国際学会が多く、5月ブラジル・リオデジャネイロにおける第3回国際細胞会議をかわきりに、7月のチェコスロバキヤ・プラハにおける第8回国際消化器病会議及び第1回ヨーロッパ内視鏡学会、9月のベルギーにおける癌発見シンポジウム、10月はオーストラリア・メルボルンにおける第3回アジア太平洋消化器病会議、東京及び京都における国際外科学会等誠に盛沢山で、「胃と腸」読者の多数がそれぞれ参加、多年の研究成果を発表し、我が国のこの方面の研究は高く評価され、その反響も大いにあったようで慶ばしいことである。特に早期胃癌の診断に関しては、X線、内視鏡、細胞診及び生検の全部門にわたって欧米をはるかに抜いて、文句なしにトップにある。しかしこの優位が今後どこまで維持出来るかは一に我々「胃と腸」読者の双肩に掛っていると云っても過言ではないと思う。尚一層の精進が望まれるわけである。

本号は多発胃癌をテーマとしてとりあげた。吉葉、久保、早川、副島各博士の綜説並びに常岡教授司会の座談会は本テーマに取組みあますところなく探究された。熟読玩味されたい。腸疾患をあつかった岡部博士らの研究はまたユニークな論文である。

胃の機能面に関する数少ない研究者の一人である松尾博士の gastrin に関する展望はこの方面の研究論文に接する機会の比較的少ない本誌読者にとって必ずや一読に価すると思う。5編の症例報告はいずれも興味深いものである。青山、崎田両博士の技術解説は、斯界の権威者による教科書や医学雑誌には書いてないX線並びに内視鏡検査のコツが述べられてあり、誰れもが読んで裨益するところの多い一文である。

奥井博士の国際細胞会議の印象記や新潟及び東海地区の研究会報告は肩の凝らない読みものである。

<春日井達造>

<編集> 早期胃癌研究会